



Title	日本語の逆接の接続詞「でも」について : 日本語学習者と日本語母語話者の比較を通して
Author(s)	中田, 一志
Citation	日本語・日本文化. 2026, 53, p. 93-107
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/104001">https://doi.org/10.18910/104001</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

<研究ノート>

## 日本語の逆接の接続詞「でも」について

—日本語学習者と日本語母語話者の比較を通して—<sup>†</sup>

中田 一志

### 0 はじめに

会話でよく使われる逆接の接続詞といえば「でも」が真っ先に挙げられるだろう。日本語には面倒なことに、「でも」のほかにも「しかし」や接続助詞「～が」「～ても」などがあり、そのなかで日本語学習者の「でも」の使用に違和感を感じるときがあるのも事実である。ここではインドネシア語を母語とする日本語学習者のコーパスを利用し、その使用を日本語母語話者のそれと比べることによって、学習者の使用の違和感の原因と母語話者にとっての無意識の制約を考える。

### 1 一般的な辞書での記述

最初に、逆接の接続詞「でも」一般的な日本語学習辞書でどう記述されているか見てみる。

グループ・ジャマシィ (2023) では (1) のような例文が挙げられ「文頭に用いて、それより前に述べられたことと相反することが続くことを表す。『しかし』より、くだけた表現で、やや会話的。文中では使われない」といった記述で前後の論理関係と社会言語的な記述がなされ、(2) を挙げることによって統語的な規則をわかりやすく説いている。

---

<sup>†</sup> 本稿はインドネシアのスマラン国立大学 (Universitas Negeri Semarang) で行われた国際学会、第二回 ICOELLA (International Conference on Education, Languages, Literature, and Arts) にて招待講演者として講演をした内容を加筆・修正したものである。

- (1) a. 友達はプールへ泳ぎに行った。**でも**、私はアルバイトで行けなかった。  
 b. 彼は新しい、いい車をもっている。**でも**めったに乗らない。  
 c. 青木さんは、自分勝手な人だと言われている。**でも**、私はそうは思わない。  
 d. 私の姉は貧乏な画家と結婚した。**でも**、とても幸せそうだ。
- (2) a. (誤) 友達はアルバイトをやめた**でも**、わたしはやめられなかった。  
 b. (正) 友達はアルバイトをやめた**が**、わたしはやめられなかった。

さて、社会言語学的文体の差を無視すると、これらの「でも」を「しかし」に変えることはできるかもしれないが、反対に全ての「しかし」を「でも」に変えることができるであろうか。

そこで国立国語研究所のコーパス I-JAS (International Corpus of Japanese as a Second Language) でインドネシア語を母語とする日本語学習者 (以降、単に「学習者」と記述する。) のデータのなかで、4、5枚の絵を見てストーリーを作ると

いうタスクで産出されたデータ、すなわち口頭で行うストーリーテリングと筆記で行うストーリーライティングのデータを使用し (「でも」は会話的だという指摘があることから主にストーリーテリングのデータを使用し、必要な時にはその都度ストーリーライティングのデータも参照する。)、日本語母語話者 (以降、単に「母語話者」と記述する。) のデータと比較することにする。トピックには「ピクニック」と「鍵」の二つが用意されているが、逆接の接続詞が現れやすい「鍵」のデータを用いる。

タスクは図1の4枚の絵を見てストーリーを完成させるという

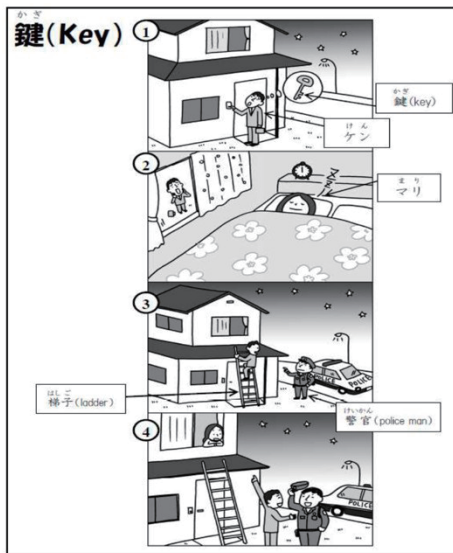


図1

もので、「ケンはずちの鍵を持っていますませんでした」から始めるように指示されている。

それぞれの絵の出来事をあえて接続詞を使わずに記述すると次のようになる。

- ①「ケンは家に帰ってきた。呼び鈴を鳴らした。」
- ②「マリは寝てしまっていた。それに気づかない。窓が開いている。」
- ③「ハシゴを使って2階から家に入ろうとした。警察官がそれを見つけて尋問した。」
- ④「ケンは警察官に事情を説明する。マリはそれに気づき、警察官も納得した。」

## 2 逆接続詞の使用

「鍵」のタスクでは逆接の接続詞は3箇所で使用される。

最初は①の「ケンが呼び鈴を鳴らした」ことと②の「マリは寝てしまっていてそれに気づかない」ことの接続関係での使用である。表1はこの場面での日本語母語話者とインドネシア語母語の学習者による逆接接続の使用数を表している。ストーリーテリングでは母語話者の逆接接続の回数は46、学習者は41、ストーリーライティングでは、母語話者の逆接接続の回数は45、学習者は38であり、逆接接続の使用に関してはストーリーテリング、ストーリーライティングのいずれも母語話者と学習者の違いはほぼないと言っている。

表1

	母語話者		学習者	
	ST	SW	ST	SW
逆接続詞	46	45	41	38
その他接続詞	2	0	4	4
接続詞なし	3	5	5	9

次に③で「ハシゴを使って2階から家に入ろうとした」ことと「警察官がそれを見つけて尋問した」ことの接続関係での使用である。表2のように②の逆接接続の使用回数と比べると母語話者の使用がストーリーテリングで13、ストーリーライティングで11と減っているのは、母語話者は時や状況を表す表現を使い分

けることができるからだと考えられ、学習者の逆接接続の使用回数はストーリーテリングで29、ストーリーライティングで24と比較的多いのは、学習者にはその他の選択肢がないことが原因だと考えられるが<sup>1</sup>、この場面でも母語話者と学習者はともに逆接の接続関係が成立すると認識していると言うことができる。

表2

母語話者			学習者		
	ST	SW		ST	SW
逆接接続詞	13	11	逆接接続詞	29	24
その他接続詞	34	37	その他接続詞	18	16
接続詞なし	3	2	接続詞なし	3	10

そしてもう一つ④でも逆接の表現が現れる。「ケン」は警察官に事情を説明することと「マリ」はそれに気づくこととの接続関係を逆接と解釈することが可能である。他の絵での逆接接続の使用数とくらべると、表3のように母語話者の使用回数はストーリーテリングで9、ストーリーライティングで9、学習者の使用回数はストーリーテリングで6、ストーリーライティングで5と、いずれの使用も少なくなっているが<sup>2</sup>、この場面でも母語話者と学習者はともに逆接の接続関係が成立すると認識しているということが言える。

表3

母語話者			学習者		
	ST	SW		ST	SW
逆接接続詞	9	9	逆接接続詞	6	5
その他接続詞	25	21	その他接続詞	21	29
接続詞なし	16	20	接続詞なし	23	16

### 3 「でも」の使用

さらに母語話者と学習者の使用する逆接接続の表現の内訳を見てみる。

表4のとおり、②の絵で「ケン」が呼び鈴を鳴らした」とことと「マリ」は寝てしまっていてそれに気づかない」ことを逆接関係と解釈した母語話者はストーリーテリングでは46、そしてその内訳は接続助詞「が」23、接続助詞「でも」10、

「しかし」6、接続助詞「けれども」3、接続詞「でも」2、接続助詞「けど」1である。同様に、ストーリーライティングで逆接接続と解釈した母語話者は45、そしてその内訳は表4の通りである。

表4

母語話者			学習者		
	ST	SW		ST	SW
～が	23	25	でも	28	18
～ても	10	14	～が	3	8
しかし	6	6	～けど	2	4
～けれども	3	0	しかし	2	4
でも	3	0	～ても	2	2
～けど	1	0	だけど	2	0
逆接接続	46	45	けど	1	0
			ですが	1	0
			その他	0	2
			逆接接続	41	38

母語話者と学習者の使用を比較すると、逆接接続詞「でも」の使用において母語話者と学習者に大きな違いがあることがわかる。母語話者はストーリーテリングで「でも」をわずか2回しか使用しなかったのに対して、学習者は28回、ストーリーライティングでは母語話者0回に対して、学習者18回である。母語話者の使用についてはストーリーライティングでは0回であることは「でも」の会話的という特徴から十分に説明可能ですが、ストーリーテリングでの使用がわずか2回しかないことは会話的という特徴からはやや説明が難しいところであるが、それについては後で触れることにする。

③では表5のとおり、母語話者は逆接表現をストーリーテリングで13回、ストーリーライティングで11回使用し、その中に「でも」の使用は一度もないのに対して、学習者の「でも」の使用はやはり多いことがわかる<sup>3</sup>。

④では表6のとおり、母語話者は逆接表現をストーリーテリングで9回、ストーリーライティングで9回使用し、その中に「でも」の使用はストーリーライティ

ングで1回ある。これは会話で使うのが主な「でも」を書き言葉で日本語母語話者が使っているという現象である。これがどんな文脈で使われたかについては後で触れることとする。それに対して、学習者の「でも」の使用はここでも多い<sup>4</sup>。

表5

母語話者			学習者		
	ST	SW		ST	SW
～が	7	2	でも	26	12
しかし	10	7	～が	3	8
ところが	6	2	しかし	0	3
～けれども	3	0	ですが	0	1
～ても	2	0	逆接接続	29	24
逆接接続	13	11			

表6

母語話者			学習者		
	ST	SW		ST	SW
しかし	5	4	でも	5	4
～が	2	4	～けど	1	0
～けれども	1	0	しかし	0	1
ところが	1	0	逆接接続	6	5
～ても	1	0			
でも	0	1			
逆接接続	9	9			

#### 4 母語話者と学習者の「でも」の使用

3節では母語話者は「でも」をストーリーテリングで3回、ストーリーライティングで1回使用したことがわかったが、具体的にどのような使用があったかを見てみる。

②で使用されたストーリーテリングの3例は(3)(4)のとおりである。

(3) 夜、ケンが、え一家に帰ってくると、ピンポーンピンポーン押してもまった

く出てきません 「あ、鍵を忘れてしまった」、そしてケン是从下から、奥さんのマリを呼びました 「マリー起きて一起きて一」、**でも**マリはまったく寝ていて気づいてくれません (JJJ16)

- (4) あー鍵忘れてしまったー ケンはチャイムを押してます **でも**マリは起きてきません ケンが大声でマリを起こそうと窓に向かって、マリの名前を呼んでいます **でも**マリは起きる気配がありません あっそういえば裏庭に梯子があった (JJJ09)

ストーリーライティングでも④で1例あったが、それは (5) のとおりである。

- (5) 夜遅くに帰宅するとマリはもう寝ていました。下から開いている窓に向かって呼んでも起きてくれません。仕方がないので、屋根に梯子をかけて窓まで上ろうとしたところ、パトカーがやってきて、泥棒と間違えられそうになりました。**でも**マリが起きてくれたので、事情を話して、警察官は笑って事情をわかってくれました。(JJJ01)

一方、学習者は文法的な間違い、統語的な間違いを犯す例が見られる。(2) で示されてように「でも」は文頭に用いられる接続詞なので先行文は文として独立していなければならないが、(6)～(9) では先行文が「言って」や「呼んで」や「上がって」や「はいて」のように動詞のテ形で接続していることから非文法的である。

- (6) マリー、マリー、マリーと言って、**でも**、マリはあー、マリは、起きません (IID02)
- (7) あー彼は、「マリー、マリー」と呼んで、**でも**マリさんはもう寝ていました (IID27)
- (8) そして、ケンさんは、梯子を持って、マリさんの部屋に上がって、**でも**、警官見つけられました (IID27)
- (9) ケンさんは、梯子で、窓に入って、**でも**、警官が「えい、泥棒」と言った

## (IID14)

学習者の自然な「でも」の使用は(10)～(13)のとおりである。

- (10) マリ、マリ、私は外だよ、ドアを開けてくださいーい **でも** マリは、よく寝てきた (IID08)
- (11) ケンは「マリさんマリさんマリさん」 **でも** マリさんは寝ています (IID44)
- (12) それから、マリを呼んでいます 「マリー、マリー」 **でも**、マリは、もう、寝ました (IID28)
- (13) ケンは、帰った時、鍵を持っていませんから、ベルを、押します **でも**、ドアが、なかなか開けて、くれませんでした (IID27)

これらは「でも」が文頭で用いられているので統語的に問題がなく、自然さを感じられる。しかし、次の(14)～(17)は統語的な問題がないにも関わらず、(11)～(13)と比べると自然さが落ちるように感じる。何が原因であろうか。

- (14) そして、ケンさんはマリさん呼びました、**でも** マリさんは寝てしまいました ケンは、マリの名前を、呼びました **でも**、マリは、起きません (IID17)
- (15) ケンさんは、なんどもなんども、マリさんを、呼びました **でも**、その時、マリさんは寝ていました (IID35)
- (16) ケンは、梯子を、持ってきて、泥棒みたいなので、警官は、来ました **でも** うるさい声があつて マリは、起きて、ケン、警官に、説明しました (IID03)
- (17) 警官は、ケンが、泥棒と思いました **でも** その時、マリは起きた そして、警官に説明しました (IID43)

自然さに関わる要因は何かについては次節で検討する。

## 5 自然さに関わる要因

まずは母語話者のストーリーテリングでの3つの使用例から検討する。

- (18) 夜、ケンが、え一家に帰ってくると、ピンポンピンポン押してもまったく出てきません 「あ、鍵を忘れてしまった」、そしてケンは下から、奥さんのマリを呼びました 「マリー起きて起きてー」、**でも**マリはまったく寝ていて気づいてくれません (JJJ16) (= (3))

(18) の下線部「マリー起きて起きてー」はケンの発言の直接引用、そして下線部「気づいてくれません」には授受動詞「くれる」が使われている。直接引用も授受動詞も「ケン」の視点から見た描写となっている。

- (19) あー鍵忘れてしまったー ケンはチャイムを押してます **でも**マリは起きてきません ケンが大声でマリを起こそうと窓に向かって、マリの名前を呼んでいます **でも**マリは起きる気配がありません あっそういえば裏庭に梯子があった (JJJ09) (= (4))

(19) の下線部「あー鍵忘れてしまったー」は「ケン」の気持ちを表現している。下線部「起きてきません」には「～てくる」が使われている。間接引用も移動動詞も「ケン」の視点から見た描写となっている。さらに「気配がありません」の「気配」は「ケン」のものである。

次に母語話者のストーリーライティングで使用された唯一の例を検討する。

- (20) 夜遅くに帰宅するとマリはもう寝ていました。下から開いている窓に向かって呼んでも起きてくれません。仕方がないので、屋根に梯子をかけて窓まで上ろうとしたところ、パトカーがやってきて、泥棒と間違えられそうになりました。**でも**マリが起きてくれたので、事情を話して、警察官は笑って事情をわかってくれました。(JJJ01) (= 5))

(20) でストーリーライティングでも「でも」が使われた環境には、下線部「起きてきてくれませんか」の「～てくる」と「～てくれる」や「間違えられる」という受け身表現、「起きてくれた」の「～てくる」、「わかってくれました」の「～てくれる」が使われている。

このように母語話者は登場人物の視点表現を使っているときに限って「でも」を使っていることに注意を払われない。

そして、学習者の自然なストーリーテリングも同様に登場人物である「ケン」の視点で描写されていることも注意を払われない。

(21) マリ、マリ、私は外だよ、ドアを開けてくださいーい **でも**マリは、よく寝てきた (IID08) (= (10))

(22) ケンは「マリさんマリさんマリさん」 **でも**マリさんは寝ています (IID44) (= (11))

(23) それから、マリを呼んでいます 「マリー、マリー」 **でも**、マリは、もう、寝ました (IID28) (= (12))

(24) ケンは、帰った時、鍵を持っていませんから、ベルを、押します **でも**、ドアが、なかなか開けて、くれませんでした (IID27) (= (13))

(21) の下線部「マリ、マリ、私は外だよ、ドアを開けてくださいーい」、(22) の下線部「マリさんマリさんマリさん」、(23) の「マリー、マリー」、そして(24) の下線部「開けて、くれませんでした」の「～てくれる」はいずれも「ケン」の視点から見た描写である。

一方、学習者の不自然なストーリーテリングは「ケン」の視点から描写されていない。

(25) そして、ケンさんはマリさん呼びました、でもマリさんは寝てしまいました ケンは、マリの名前を、呼びました **でも**、マリは、起きません (IID17) (= (14))

(26) ケンさんは、なんどもなんども、マリさんを、呼びました **でも**、その時、

マリさんは寝ていました (IID35) (= (15))

(27) ケンは、梯子を、持ってきて、泥棒みたいなので、警官は、来ました **でも** うるさい声があって マリは、起きて、ケンは、警官に、説明しました (IID03) (= (16))

(28) 警官は、ケンが、泥棒と思いました **でも**その時、マリは起きた そして、警官に説明しました (IID43) (= (17))

(25) の下線部「マリは、起きません」、(26) の下線部「マリさんは寝ていました」、(27) の下線部「マリは、起きて」、(28) の下線部「マリは起きた」のいずれも中立的な描写である。例えば、(25) の「マリは、起きません」を「マリは起きてきません」や「マリは起きてくれません」あるいは「マリは起きてきてくれません」に変えると随分自然な文になる。このことから「でも」の自然な使用には視点を明示する必要があると言えるだろう。

## 6 まとめと他の逆接の接続詞との比較

逆接の「でも」は (29) (30) のように森田 (1989) の指摘の通り話し手の弁解を表すことができる。

(29) 試験はあまりよくなかった。**でも** 60点とれたからいいや。

(30) 「遅刻しちやいかん」「**でも**、僕はずっと走ってきたんです」

また、石黒 (2008) は「「でも」の私的性格は、頑固さや協調性のなさ、言い訳っぽさにつながりかねない面があります」と指摘している。このような弁解や言い訳っぽさは動作主である話し手が自分中心のコメントをするからだと考えられる。このことから (31) のようなまともができる。

(31) 「でも」は話し手の個人的な視点、あるいはその人物の視点で描くときにもっとも適している。したがって、話し手中心の表現やはっきりと登場人物の視点を表す表現、たとえば引用、「～くれる」、「～てくる」とよく合う。

次に、逆接の接続表現には文接続詞「でも」のほかに、接続助詞「が」「ても」、文接続詞「しかし」などがあるが、これら逆接の接続詞を使用するとき視点はどのようなかを見ておく。

表7は日本語母語話者のこれらの逆接表現が登場人物の視点表現と共起する数を数えたものである。「でも」についてはすでに見たように3例すべて視点表現と共起しているのに対して、他の逆接表現では視点表現と共起はしなくてもよいことを示している。その証拠として、母語話者のストーリーテリングの中で視点の表現と共起していない例のなかから次の3例を挙げておく。

表7

視点表現	母語話者			
	でも	～が	～ても	しかし
あり	4	3	1	0
なし	0	20	9	6
合計	4	20	9	6

(32) チャイムを鳴らしますが、二階でぐっすり眠っているマリは、なかなか目を覚ましません (JJJ08)

(33) ケンがマリのことを呼んでもマリは二階のベッドでぐっすり眠っています。(JJJ11)

(34) どうしようかとケンが迷って、えと家の外から、マリを、大声で呼びましたしかし、マリはぐっすりと寝ていました (JJJ15)

(32) の「～が」の例では「チャイムを鳴らします」「二階でぐっすり眠っているマリは、なかなか目を覚ましません」のいずれも視点の表現がなく、(33) の「～ても」の例でも「ケンがマリのことを呼ぶ」「マリは二階のベッドでぐっすり眠っています」のいずれも視点の表現がない。(34) の「しかし」の例でも「ケンがマリを大声で呼びました」「マリはぐっすりと寝ていました」のいずれも視

点の表現がない。このことは「でも」が視点表現を強く要求するのと対照的であると言えよう。

このように他の逆接の接続詞との比較からも「でも」が、話し手の中心の表現や登場人物の視点を表す表現とよく合うという特徴を持つことを明らかにした。

次に、冒頭で挙げたグループ・ジャマシィ (2023) の例について確認しておく。

- (35) a. 友達はプールへ泳ぎに行った。でも、私はアルバイトで行けなかった。  
 b. 彼は新しい、いい車をもっている。でもめったに乗らない。  
 c. 青木さんは、自分勝手な人だと言われている。でも、私はそうは思わない。  
 d. 私の姉は貧乏な画家と結婚した。でも、とても幸せそうだ。(以上、＝  
 (1))

(35a)(35c) は「私」の経験談であるから話し手の視点を取り、(35d) は「幸せそうだ」という様態の表現も話し手の視点からである。そして、(35b) は「彼」についての記述であり、話し手の視点をとっていないように見えるが、頻度副詞「めったに」を使っていることを考えると、なんらかの話し手の評価が入っていると解釈できると考えられる。すなわち、「いい車をめったにしか乗らないのはもったないない」という話し手の評価、つまり話し手の視点があると考えられるだろう。(35) はすべて中立的な「しかし」で言い換えることができるのであるが、同時に「でも」も使うことができる条件が揃っているということである。

最後に日本語学習者一般に指摘されている「反論」の意味が強く出る不自然な「でも」の使用について触れておきたい。Mori (1999) は会話分析の手法を用いて意見交渉のメカニズムを解明したものであるが、そこではターン冒頭の「でも」は先行する意見に対して明示的に不一致を表明するものであると指摘する。したがって学習者による無意識の使用は対人関係の摩擦の原因ともなりかねない誤用になる可能性がある。このターン冒頭の「でも」についても本稿の視点表現を好む「でも」の性質と密接に関連すると考えられる。本稿の議論からすると、相手が意見を述べたりアドバイスをしたりなどした後、即座に「でも」でターン

をとり始めると相手と対立する視点を持つという態度、ひいては敵対的態度を表明することになるということになる。逆接の接続詞「でも」という頻繁に使われる接続詞であるからこそ教育で配慮が必要だと感じるわけである。

## 註

- 1 この比較についても興味深いが、本稿では取り扱わない。
- 2 この比較についても興味深いが、本稿では取り扱わない。
- 3 逆接接続以外では学習者が順接の接続詞「そして」「それから」の使用がストーリーテリングで見られたということも興味深いが、本稿では取り扱わない。
- 4 逆接接続以外では学習者が順接の接続詞「そして」「それから」の使用がストーリーテリングだけでなくストーリーライティングで見られたということも興味深いが、本稿では取り扱わない。

## 引用文献

- 石黒圭（2008）『文章は接続詞で決まる』光文社
- グループ・ジャマシィ（2023）『日本語文型辞典 改訂版』くろしお出版
- 迫田久美子（2020）「I-JAS 誕生の経緯」迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬（編著）『日本語学習者コーパス I-JAS 入門：研究・教育にどう使うか』（pp.2-13）くろしお出版
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
- Mori, J. (1999) *Negotiating Agreement and Disagreement in Japanese: Connective expressions and turn construction*. John Benjamins.

付記：本研究は科研費 24K03979 の助成を受けたものです。

キーワード：逆接接続詞、「でも」、視点表現、学習者、母語話者

## **The Japanese Adversative Conjunction ‘*Demo*’: A Comparison of Uses among Indonesian Japanese Learners and Native Japanese Speakers**

NAKATA Hitoshi

This study investigates the overuse of the adversative conjunction ‘*demo*’ by Indonesian learners of Japanese. Analyzing storytelling data from the I-JAS corpus, the author compares learner performance with native speaker data to identify the conditions for natural usage. While learners frequently use ‘*demo*’ for neutral, objective descriptions of events, native speakers use it very sparingly in narrative tasks. Crucially, native speakers’ instances of ‘*demo*’ are found to co-occur exclusively with “perspective expressions,” such as direct quotes, giving/receiving verbs (*kureru*), and directional aspect markers (*-te kuru*).

These findings empirically demonstrate that ‘*demo*’ is a speaker-centered conjunction that functions best when aligning with a character’s subjective viewpoint. The study suggests that Japanese language education should focus not only on the syntactic rules of conjunctions but also on their relationship with discourse-level perspective-taking.